

高等教育機関における音楽アウトリーチ活動に関する実践的研究

—— 活動内容と学生の省察を中心に ——

A Practical Study of Music Outreach Activities in Higher Education
— Based on activity contents and students' reflections —

児童学科 川上 健太郎* 根津 知佳子
Dept. of Child Studies Kentaro Kawakami Chikako Nezu

*日本女子大学学術研究員

抄 録 音楽アウトリーチ活動が日本に普及して 20 年以上が経つが、高等教育機関における演奏家によるアウトリーチ活動の実践例は、初等・中等教育機関における実践例と比べると、極めて少ないといえる。本研究は、学生の専攻領域やカリキュラム上の位置づけを考慮した上で演奏家によるシナリオ型の活動を試行したものである。活動内容と学生の省察に関する記述を分析することで、その活動内容や展開方法を検討した。その結果、本実践はアメリカを中心に拡大しているティーチング・アーティストの活動と類似していることが明らかとなり、学生の学びの質を担保するための視点・今後のアウトリーチ活動の実践における改善の視点が示唆された。

キーワード：アウトリーチ活動、高等教育機関、シナリオ型活動、ティーチング・アーティスト、エントリーポイント

Abstract More than 20 years have passed since music outreach activities were brought in Japan, but practical examples of outreach activities by performing musicians in higher education institutions are far fewer than in primary education or secondary education. In this study, a scenario-based activity by performing musicians was undertaken, taking the principal field of study of students and their curriculum into consideration. By analyzing the contents of the activity and students' reflections, the contents of the activity and the method of development was examined. As a result, it was clarified that this scenario-based activity is similar to teaching artists' activities, that have expanded especially in the United States, and provided viewpoints to guarantee the quality of students' learning. Suggestions for the improvement of outreach activities for the future were indicated.

Keywords: outreach activity, higher education, scenario-based activity, teaching artist, entry point

1. 研究の背景と目的

アウトリーチ (outreach【英】) という言葉は、「手を伸ばすこと、差し伸べること」という意味をもつが、音楽分野でのアウトリーチ活動とは、音楽家や音楽団体・機関が芸術に普段触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することである。日本では、1990 年代末ごろからアウトリーチの概念や欧米での事例が盛んに紹介されたが、20 年以上

が経過した現在では、音楽アウトリーチ活動 (以下、アウトリーチ活動) に関する研究が蓄積されていることを確認できる (永島 2021)¹⁾。

アウトリーチ活動の広まりの一つとして、林 (2009)²⁾ は学校音楽教育を取り巻く環境の変化を挙げているが、アウトリーチ活動に関する研究の中の一つに、アウトリーチの享受側として、児童や生徒を対象としたアウトリーチ活動の実践が挙げられよう。これらは、音楽科の授業内 (外) に、演奏家

を外部から招聘してアウトリーチ活動を実践するものであるが、高等教育機関における演奏家のアウトリーチ活動の実践例は、小学校や中学校における実践例と比べると、極めて少ないと言えるであろう。

又、林 (2003)³⁾ や梶田 (2010)⁴⁾・齊藤 (2013)⁵⁾ は、アウトリーチ活動における特徴 (形態や目的・期間) から分類しているが、活動の“期間”に注目するならば、アウトリーチ活動は、単発型と継続型に分類できる (梶田 2010)。それぞれのプログラムの効果の違いについては、しばしば議論が重ねられているものの、継続的なアウトリーチ活動については、「継続的・長期的な実施がアウトリーチの効果を高める」(地域創造 2010)⁶⁾ ことや「2 回目以降、徐々に楽曲や演奏に興味・関心が向けられた」(梶田 2010) ことに見られる通り、その教育的な効果が実証された事例を確認できる。その一方で、単発型の活動では、年1回の「行事」としての意味はあるものの、音楽科の「授業」としては捉えられていない見方もいまだ根強いとの指摘 (上村・小野 2021)⁷⁾ が挙げられる。ここで、国内のアウトリーチ活動の実践を概観すると、継続型の活動は、単発型の活動に比べて、主流であるとは言い難い。これは、音楽科の授業時数の削減や活動の企画に関わる時間の確保といった時間的な問題・活動の実施にかかる金銭的な問題を考慮した場合、当然のことであろう。よって、単発型のアウトリーチ活動の質を担保できるように、活動の内容や展開を検討することが求められる。又、活動を通して子どもが何を学んだか、活動が子どもに及ぼす効果やその効果をもたらすメカニズムを検討する研究 (上村・小野 2021) がある一方で、活動における子どもの振り返りを基に、実践者がより良い活動をするために実践を省察した事例が管見の限り見られないことも勘案すべきであると考えられる。

以上の研究動向を踏まえ、以下の2点を本研究の目的とする。まず、実践例の少ないと言える高等教育機関におけるアウトリーチ活動の単発型の実践を通して、その活動の内容と展開を検討することである。次に、活動における学生の省察に関する記述の分析を通して、実践者がアウトリーチ活動を省察することで、今後のアウトリーチ活動における改善の視点を獲得することである。

2. 研究方法

2-1 アウトリーチ活動の概要

本研究で実践したアウトリーチ活動の概要と場の構造は表1・図1の通りである。

表1 アウトリーチ活動の概要

日時	2021年6月29日(火)3限
場所	雑司ヶ谷音楽堂
企画者	根津知佳子
実践者	川上健太郎
対象	「フィールドワーク演習」受講の16名
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・単発型のアウトリーチ活動である。 ・バロックから近現代までのピアノ曲の鑑賞活動で構成される。 ・実践者は、以前、「音楽実技」で受講者数名のピアノの実技指導に携わった。 ・受講者のうち数人は、雨を題材にした即興活動を以前に経験している。

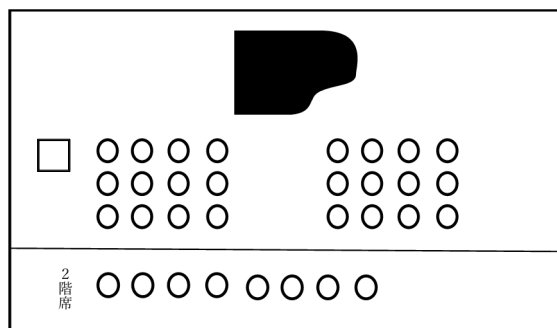


図1 アウトリーチ活動の会場図

2-2 アウトリーチ活動の企画と実践

2-2-1 アウトリーチ研究における本実践の位置づけ

齊藤 (2013) は、アウトリーチ活動を3つの階層に分類しているが、本実践では、鑑賞系-鑑賞型における音楽学習タイプの活動を企画者・実践者が協議した上で採択した。理由は以下の通りである。

- ①音楽学習タイプは、鑑賞が主軸であるものの、音楽家による事前学習 (作曲家の紹介や作曲の背景などの楽曲解説などを含む。) がプログラミングされており、より“対話的な”鑑賞活動に繋がるのではないかと考えたためである。
- ②音楽学習タイプと隣接した芸術鑑賞教室タイプを採択した場合、実施しやすい反面、単なる単発の

イベントに終始してしまい、“受動的な”鑑賞活動に陥る可能性がある」と判断したためである。

- ③実践者はピアニストであると共に、以前、「音楽実技」で受講者数名のピアノの実技指導に携わった経験があるため、対象者の音楽的な資質や能力の現状を把握した上で、適切な学習内容を選択できると判断したためである。

2-2-2 活動の枠組み

本実践では、小田・根津ら (2019)⁸⁾ の実践に見られるように、曲の演奏と実践者の語りで構成された授業シナリオを枠組みとして用いる。本実践にあたって、音楽的な要素を聴取る鑑賞の能力に、学生間によって個人差が生じていることが懸念され、音楽学的内容に特化した活動では、学生の学びの質を十分に担保することができないと考えた。よって、学生の専攻領域を考慮した上で、「生活の中の音楽に対する興味・関心の育成」を目指して設計された小田・根津らの実践を枠組みとして使用することで、個人の音楽的な資質・能力のみに依存しない授業展開に繋がると考えた。

2-2-3 活動の内容と展開

活動の内容と展開は以下の通りである。実践者の語りについては、表3にて詳述する。又、本活動の後、学生は、活動を踏まえた振り返りの自由記述をWeb上で記入し、授業者に提出した。

表2 活動の内容と展開

時間	演奏曲目	シナリオ
0:00		K1
02:06	バッハ：『ゴルトベルグ変奏曲』 ト長調より“アリア”	
04:23		K2
08:07	スカルラッティ：ソナタニ短調 K.9/L.413	
10:05		K3
11:46	モーツァルト：ピアノ・ソナタ第17番 変ロ長調 K.570 より第1楽章	
16:20	(曲間休憩)	
16:58		K4

20:22	ショパン：『24のプレリュード』作品28より第15番 変ニ長調 “雨だれ”	
25:34		K5
29:47	ドビュッシー：『版画』より I.パゴダ	
35:42		K6
37:09	ドビュッシー：『版画』より III.雨の庭	
41:12		K7

2-3 本実践の分析方法

2-3-1 活動の内容と展開についての分析方法

実践者を中心とした活動の様子をビデオカメラ(図1の□の位置に設置)で記録し、実践者の語りの逐語録を作成した。逐語録の中で、実践者が本活動において重視していると考えられる箇所を抜き出し、コーディングを行った。その後、得られたコードの類似性・関連性を整理した上で、カテゴリーとして分類した。

2-3-2 学生の省察に関する記述の分析方法

学生の振り返りの記述の分析には、フリー・ソフトウェアのKH Coder (Ver.3.Beta.01a) (樋口)⁹⁾を使用した。なぜなら、学生が本実践を通して学んだことを、分析者のもつ理論や問題意識の影響を極力受けない形でデータを要約・提示することを第一に考慮したためである。本実践では、得られたデータの数が少ないため、特徴的な語や語と語の共起のパターンを“探索的に”分析し、データの全体像を捉えた上で、もとのデータ中でそれらがどのように使用されているのかを吟味した。

3. 結果

3-1 活動の内容と展開について

実践者の活動の逐語録とコーディングを以下に記す。実践者の逐語録では、意味を理解する上で補足が必要と思われる語があった場合は、括弧を用いて表記している。

表3 アウトリーチ実践者の語り

時間	曲目	実践者の語り
0:00		【K1】まず、演奏させていただきます曲なんですけども、J.S.バッハという方のゴルトベルグ変奏曲より、アリアを演くテキストにあったと思うので、演奏してもらえたとするんですけども、バッハの作品と言うと、とても均整美のルドベルグというのはバッハの弟子の名前なんです。その弟子が仕えていた王様がいらっしゃるんですけども、まあ当時えー、その王様が不眠症だったんです。で、その王様のためにバッハが作ったという作品の経緯があります。こー時間かかるんですけど、全部弾くと。さすがにそうになってしまうとみんなも不眠症ではないと思うんですけど、
02:06	バッハ：『ゴルトベルグ変奏曲』ト長調より“アリア”	
04:23		【K2】えー、今回プログラムを組むに当たってコンセプトがあるんですけど、クラシックの音楽というのは、バスタもそういうことで編成されていたと思うんですけども、それもちょっと今日は感じながら演奏を聴いてほしいラッティという人の作品を演奏するんですけども、その人もバロック時代を代表する作曲家です。奇遇にも二人は「ア」とかありますけど、このヘンデルも同じ年に生まれている。なのですごい3人が同じ年に生まれているといです。で、えーとソナタという、まあ例えば、みんながやったモーツァルトのソナタとかあると思うんですけども、スカルラッティの作品のほとんどは2つの部分で構成されているんですけど、2つの部分で構成さティってイタリアに生まれたんですけども、王女様の音楽教師をしていたんですけど、その王女様が、その時はんで。で、そのまま晩年も過ごんですけども、その時に大量のこのソナタが生まれたと。なので作品の曲想が魅力的です。で、さっきのバッハというのは、これは演奏家としての僕の個人的な解釈ですけど、とても、なんしてはとも、何ていうのかな、革新的なアバンギャルドな感じ。当時の人が聴いたら多分「何だろう、このもないかもしれないですけど、その時代に自分がいたとしたら、どんな風な感じを覚えたかかと、ちょっとさっき
08:07	スカルラッティ：ソナタニ短調 K.9/L.413	
10:05		【K3】えー、ここまでがバロックという時代ですね。で、その後が古典派という時代が来るわけですけど、えー作曲家だと思んですけども、えー、今日はモーツァルトのピアノ・ソナタより1楽章を抜粋して演奏していきたくて、とてもオペラとかで有名だったと思うんですけども、小学校とかでも魔笛の「パ・パ・パの2重唱」とかそういうので、何かオーケストラの交響曲のようなそんな感じの趣もある曲です。えー、これはモーツァルトがお亡くなり
11:46	モーツァルト：ピアノ・ソナタ第17番 変ロ長調 K.570より第1楽章	
16:20	曲間休憩	
16:58		【K4】えー今のモーツァルトが古典派の作曲家ですね。で、えーと、続きまして、19世紀に移っていきんですけどフランス革命と、とても多くのものが変わるきっかけとなったわけですけども、音楽もそれによって変わったんですけども、ベートーヴェンという人は初めての市民音楽家と言いますけど、まあ援助は受けていたんですけども、その特権階級が没落していきますから、その時にロマン派という時代は、個人の感情、内面を重視する時代なんです。テキストにあったと思うんですが、ロマン派の作曲家ですね。で、まあショパンの前奏曲も、(この中の学生は、ショパンの前奏曲より第15番“雨だれ”という曲なんですけども、えーとまあ、この作品はショパンの20療養しに行くんですね。で、その時に、まあ当時付き合っていたショパンの彼女ジョルジュ・サンドという方がいて、建物もそんなに良いところに住んでいないので、こう雨漏りしてしまうんですね。で精神的にも病んでいた時だれの雫の音がどこに表れているかなというのをちょっと感じながら聴いて頂けたらと思います。ショパン作曲の
20:22	ショパン：『24のプレリュード』作品28より第15番 変ニ長調“雨だれ”	
25:34		【K5】えー、そして、最後なんですけども、近現代という時代に移っていきます。取り上げる作曲家なんですけども、そこからドビュッシーとなると、20世紀までいくわけですね。なのでまあ1900年代くらいのことだと思っノ音楽の黄金期だったんですね。なので、その“家庭音楽”という言葉が生まれたくらいで、例えば、ご飯食べたピアノ(アップライト・ピアノ)も多いと思うんですけども、ピアノが家庭に普及していた時代、それに呼応しという楽器自体が進歩しますので、とても音色、色彩感覚とか音色ですね、が、とてもさっきのバッハ・モーツァの曲の背景なんですけども1889年ですね、19世紀の終わりなんですけども、“バリ万博”というものがありました色々な音楽を聴いた、例えばバリとかジャワとかガムランの音楽とかアフリカの音楽だとか、あとはスペインの音画という作品は3つの作品から構成されているんですけども1つが『バゴダ』といって、塔という意味ですね、2つています。今回は、1曲目の『塔』と3曲目の『雨の庭』というのを聴いて頂きたいなと思います。で、本来ですえーとこの塔という曲なんですけども、聴いてもらえると分かると思うんですが、とても異国情緒溢れた、とてもだとか、なにかちょっとそういう東の世界への憧れというのがその時代にはあると思うんですけども、とてもその
29:47	ドビュッシー：『版画』よりI.バゴダ	
35:24		【K6】えー最後の一曲になるんですけども、『版画』の3曲目の『雨の庭』という作品です。先ほど“雨だれ”ですね。で、曲の途中でとても歌謡的な、民謡が出てくるんですけども、その民謡もフランスの古くから伝わる民本みたいなこういうジメとした感じではなくて、カラカラした雨らしいんです。で、雨が降る時も、非常におの雨もずつとしととと続くよりは、パッと止む様なそういう雨らしいんですね。で、それを聴いた時に、この曲んですけど、ドビュッシーはどんな風にフランスの雨の情景を描写したのかっていうのをちょっと考えながら演
37:09	ドビュッシー：『版画』よりIII.雨の庭	
41:12		【K7】えー、これでプログラムは終わりなんですけども、えーと、楽器も進化しているんですけども、時代によっ何にモダンの楽器でその当時の奏法なども尊重しながら、だけどもあ当時の奏法を尊重すると言っても、やっぱりいうことを大切にしています。えー、なかなかレッスンではまあ短時間なのでなかなか、時代のこととか作品のどんですが、音楽を聴くときにやっぱりそういうのって意識されると、とても楽曲のアプローチの仕方が変わると思

<p>奏致します。バッハという作曲家ですが皆さん知っていますか？あー、みんなもバロックという作品は、恐ろとれた、パランスのとれた作品がとても多いですね。この曲は、ゴルドベルグ変奏曲と言うんですけども、ゴは音楽家というのは王様に仕えて教えたりだとか、一緒に演奏したりだとか、そういうスタイルだったので。の曲、本当はバリエーションといって変奏曲なので、主題が提示されたら変奏させていくわけですけども、えー、眠ってしまうと思うので（笑）、今日は有名なアリアだけ演奏したいと思います。</p>	<p>コード</p> <p>「ピアノ実技」における学びの振り返り</p> <p>徒弟関係/当時の音楽家のライフ・スタイル 音楽療法的な働き</p>
<p>ロック・古典派・ロマン派そして近現代と4つの時代様式に分けられることが多いですね。恐らくみんなのテキなと思うんですが、今のバッハはバロック時代の有名な作曲家なんですね。で、今から演奏する今度はスカル生まれた年が同じなんです。1685年に生まれている。ちなみにこの年ってヘンデル「勇者は帰る」とか「メサうのは、とてもすごいことなんですけども、えーこのスカルラッチェという人は500曲を超えるソナタを作ったんですけども、それってこう主題が提示してそれが展開されて、で最後また主題が戻ってくるみたいな曲が多いと思うんれているんですけども、その前にスカルラッチェがどういう人だったかを説明したいと思います。スカルラッ女王様ではなかったんですけども、(後に)スペインの王女になるので、その時にスカルラッチェも移住していくとしては、エキゾチックで、スペイン風なのは、それは分かんないですけども、異国情緒あふれるような曲想かさつきも言いましたが、均整美がとれた感じですね。それに対して、スカルラッチェというのは、イメージと曲」ってすごい衝撃だったと思うんですね。なので、まあみんなは新しい曲を知っているから、あまり驚くことこのバッハと比較しながら聴いて頂けたらと思います。スカルラッチェのソナタニ短調です。</p>	<p>時代様式によるクラシック音楽の分類</p> <p>「ピアノ実技」における学びとの往還 時代を代表する同時期の作曲家</p> <p>作品の形式における独自性 作曲家の生い立ち</p> <p>演奏者の個人的な曲に対するイメージ</p> <p>作曲家同士の比較</p>
<p>まあみんなが良く知っている作曲家だと、ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェン、この3人が古典派で有名ないます。で、まあモーツァルトなんんですけども、まあ大体18世紀の終わりあたりですね、活躍した作曲家いうのを聴いたことがあると思うんですけども、今から演奏する曲もオペラ的であり、又、色々な音域の音を使ってになった2年前の作品なので、晩年の作品ですね。ピアノ・ソナタ第17番変ロ長調の第1楽章をお聴き下さい。</p>	<p>初等教育の音楽科授業における既習曲の振り返り/同一作曲家の他ジャンルの楽曲との関連性</p>
<p>が、えーロマン派の作曲家の作品を取り上げたいと思います。で、えーとまあ18世紀というと1789年というのはすね。で、えーもともと古典派までっていうのは、えーと作曲家は貴族だとか王様に仕えて生計を立てていた、それがメインの作曲家ではなくなっていった。で、まあフランス革命をきっかけにまあその身分というのが、すね、で、えーと代表的な作曲家って、まあみんなが取り組んだ作曲家だとシューベルトとか、恐らくシューマで)誰かやってた気がするんですけども。えーと、ショパンもロマン派の作曲家なんですね。で、今から演奏するの代の作品で、ショパンは病弱だったんですね、結局は肺結核を患って死んでしまうんですけども、その時に鳥にらっしゃって、まあその方と一緒に住んでいる時に、逸話なので定かか分からないんですけども、1人で部屋に期だったので、とてもそれでショパンのその、何ていうんですかね、内面性がよく表れた曲だと思います。で、雨ブレイユードより雨だれを演奏します。</p>	<p>歴史的史実</p> <p>「ピアノ実技」における学びの振り返り</p> <p>健康状態 生活環境 心理状態 雨の表現技法</p>
<p>ど、ドビュッシーの版画という曲を演奏します。えー今のショパンが1810年から1849年に活躍された方なんですくれるといいと思います。で、えーとさつき言わせて頂いたんですけども、ロマン派の時代というのは、ピアノ後、家庭で、お父さんが弾きながら伴奏しながら子どもが歌うとか、ピアノが家庭に普及してた、もちろん小さく作曲家がピアノ音楽を昇華させた、高めていったわけですね。で、ドビュッシーくらいになると本当にピアノルトからきてショパン・ドビュッシーと並べてみると又違う印象を持たれるんじゃないかなと思います。で、こて、そこでいろいろな音楽が流れていたみたいなんです。その時にドビュッシーも行ったみたいで、そこで楽だとか聴いたみたいなんです。で、それにインスピレーションを受けてこの版画という作品を作曲した。版目が『グラナダの夕べ』という、それはスペインを表している。で3曲目が『雨の庭』という、その3曲で構成さ1、2、3曲全部通して弾くんですけど、今日はこういう場ですから、1曲ずつ演奏したいなと思います。で、東洋風な響きがします。東洋風の、何が描かれているかは想像するしかないんですけど、例えば踊りだとか儀式エキゾチックな曲調が魅力的な作品です。では一曲目の『塔』をお聴きください。</p>	<p>当時の社会における音楽の役割 ピアノという楽器の進化 作曲家ごとの異なる音楽的イメージ 歴史的史実 他国の音楽との関わり</p> <p>他国の音楽との関わり 他の文化圏への憧れ</p>
<p>ということて雨を題材にした曲だと思うんですけども、この曲はフランスの情景を描いたものと言われてるん話なんです。ヨーロッパの雨というの、僕も実際行ったことがないで想像するしかないんですけど、まあ日しれだと思ったのは、フランスのマダムみたいな人たちは、雨が降るとスカarfを巻くらしくて、だからそと個人的には繋がるころがある。さつきのショパンの曲ってどちらかというウエットな感じがしたと思う奏を聴いて頂けたらと思います。</p>	<p>ピアノ曲の中に登場する自国の民謡 雨の質感/雨との関わり 雨の降る様子 作曲家の雨に対するイメージ</p>
<p>て、で、今回スタインウェイという楽器を用意したんですけど、僕の演奏家としてのこだわりなんですけど、如このモダン楽器で弾くことに変わりはないので、それを如何に現代の楽器で演奏して皆さんにお伝えできるかという時代に属するの、その時代の「らしさ」とかに関してなかなかお伝えすることってできなかったと思うので、是非今後も音楽と関わりを持って大学生活を送って下さい。ありがとうございました。</p>	<p>42 : 51 終了</p>

実践者の語りの逐語録を基に得られたコードとそれを基に分類したカテゴリーは以下の通りである。

表4 カテゴリーとコード

カテゴリー	コード
ピアノ学習とのつながり	「ピアノ実技」における学びの振り返り
	時代様式によるクラシック音楽の分類
	「ピアノ実技」における学びとの往還
	時代を代表する同時期の作曲家
初等教育の音楽科授業とのつながり	作曲家同士の比較
	初等教育の音楽科授業における既習曲の振り返り
	同一作曲家の他ジャンルの楽曲との関連性
作曲家の作曲技法	音楽療法的な働き
	作品の形式における独自性
	雨の表現技法
	作曲家ごとの異なる音楽的イメージ
	ピアノ曲の中に登場する自国の民謡
他者のモノに対するイメージ	演奏者の個人的な曲に対するイメージ
	作曲家の雨に対するイメージ
身の回りの環境	雨の質感
	雨との関わり
	雨の降る様子
作曲家個人に関するエピソード	徒弟関係
	作曲家の生い立ち
	健康状態
	生活状況
	心理状態
音楽と社会の関わり	当時の音楽家のライフ・スタイル
	当時の社会における音楽の役割
	ピアノという楽器の進化
歴史的背景	歴史的史実
他国の文化とのつながり	他国の音楽との関わり
	他の文化圏への憧れ

3-2 学生の省察に関する記述

16名の学生の省察に関する記述を KH Coder で分析したところ、総抽出語数（使用）は 2412（932）

語、異なり語数（使用）は 438（324）語であった。まず、KH Coder による抽出語リストと、語と語が共に出現する関係性を表した共起ネットワークを使用して分析した。データの中で注目すべき語・語と語の共起を探索していく過程で、データの表記の揺れなどを発見した際には、統一するためにデータのクレンジングを行った。

使用頻度が2番目に高かった「感じる」に注目すると、「感じる」という語は、「表現」・「雨」・「音楽」と共起している。本実践では、歴史的背景について言及したため、「時代」という語も多く見られたが、それと共に「意図」という語が使用されているのは興味深い。学生は、企画者・実践者が本活動で何をねらいとしているか「意図」を「考え」ているのである。又、文書検索を行った結果、この「意図」という語は、(実践者の)「想い」や「思い」といった言葉と同義語として使用していることが分かったため、「意図」として、表記の揺れを統一した。又、漢字や平仮名などで単語の表記の揺れが見られるものを統一して得られたのが、表5と図2である。

表5 抽出語リスト

順位	抽出語	頻度
1	音楽	43
2	感じる	24
3	曲	21
3	時代	21
5	意図	20
6	思う	17
7	聴く	15
7	表現	15
9	雨	14
9	演奏	14
11	プログラム	12
11	音	12
11	先生	12
14	考える	10
15	想像	8
16	異なる	7
16	違う	7
16	作曲家	7
16	知る	7
16	変化	7

4. 考察

前述した活動の内容・展開の概要やそれらの分析を踏まえ、国内外に見られる本実践と類似した事例・モデルと比較することで、本実践の構造や改善の視点を明らかにする。アメリカでは Booth らによって、ティーチング・アーティスト (teaching artist 【英】) という領域が開拓され、その実践例が報告されており¹⁰⁾、日本でも、大類 (2015)¹¹⁾ や久保田 (2019)¹²⁾ などによって、その研究や実践事例などが見られる。Booth (2009) は、ティーチング・アーティストに関する明確な定義がないことを前提とした上で、ティーチング・アーティストとは「芸術を教えるだけでなく、芸術を通して人を教育することを、仕事の一部としている人」という定義を紹介しているが、加えて、彼が共感する定義の一つとして「21 世紀の芸術家のモデルの一つがティーチング・アーティストで、それはまた教育分野における高度な参加型学習のモデルである」ことも列挙している¹³⁾。本実践は、ティーチング・アーティストによる教育的プログラムと大いに類似したものとして位置付けられると考えるが、根拠を以下に列挙する。

まず第一に、実践者が本活動においてどのように機能しているのか学生との関係を中心に述べる。実践者はピアニストであり、以前、「音楽実技」で受講者数名のピアノの実技指導に携わった。その経験から、学生が音楽的な資質や能力をどの程度もっているのか、企画者と共同した上で、学生の受講しているカリキュラムにおける音楽の位置づけや他の科目との関連性を考慮して、本活動の内容を設定した。これらは、Booth のティーチング・アーティストのガイドラインにおける「生徒たちを知る」、「担任教師と共同する」、「カリキュラムとのつながり」¹⁴⁾ と同義であると考えられる。又、外部から演奏家を招聘することも可能であるにも関わらず、本活動では、実技指導を通して人間関係を構築した実践者が演奏している。つまり、ティーチング・アーティストが学生との間に形成する関係性の質そのものがエントリーポイントとして機能しており、本活動がティーチング・アーティストによる実践であることを示した一因であると言える¹⁵⁾ (エントリーポイントについての詳細は後述する。)

次に、ティーチング・アーティストによる活動で

は、エントリーポイントの設定が重要となるが、エントリーポイントとは、「音楽経験の少ない聴衆にとっても、音楽の内容を理解して、価値ある体験ができるための「入口」」¹⁶⁾ であるが、Booth によれば、「作品の神髄にせまるもの」であり、「観客の各人がつながりを見出せそうなものを選ぶこと」を提唱している¹⁷⁾。そこで、活動の内容や展開・学生の省察についての分析を通して、本活動でエントリーポイントとしての機能が示唆されたものを考察する。まず、「生活の中の音楽に対する興味・関心の育成」を目指して設計された本活動では、雨に関する曲をプログラムの後半のテーマとしているが、活動の展開と学生の省察の記述に注目していく。ショパンの『雨だれ』では、健康状態・生活環境・心理状態を含む作曲家個人を描くエピソードを紹介し、作曲家の当時の創作に向かう姿を想像させた上で、雨だれの音がどのように表現されているか作曲家の表現 (作曲) 技法を尋ねている。ドビュッシーの『雨の庭』では、雨の質感・雨との関わり・雨の降る様子など学生の「身の回りの環境」と比較した後に、「他者 (= 作曲家) の雨に対するイメージ」を喚起できるよう働きかけている。その結果、図 2 のように省察の記述では、「表現」は「雨」との共起に加えて、「異なる」とも共起していること、同時に、「雨」は「違う」という語と共起している。「異なる」、「違う」という言葉の特徴を考慮すると、これは“複数のモノを比較”することができているが故に出現している語であると言える。使用例を以下に示す (下線部は筆者による)。

<p>生徒 A：雨という共通のイメージをもとにして生まれた曲でも、作曲家、時代、地域などが<u>違う</u>ため、全く<u>違う</u>「雨」の想像をすることができます。</p> <p>生徒 B：同じ「雨」をテーマに作られた曲でもロマン派と近現代では雨の表現の仕方が<u>異な</u>っていました。</p>

以上を踏まえると、「創作時の作曲家個人を描くエピソードを基に作曲家の表現 (作曲) 技法を感受すること」、「個人の身の回りの環境を省察した上で、他者 (作曲家) のモノに対するイメージを想起すること」の 2 点が本活動におけるエントリーポイントとして機能していたことが示唆された。又、以前に

体験した雨の音を模倣した即興活動や児童学科のカリキュラムにおける「環境」の学びとも深く関連している材を提示したことが学びを深める一因になったことも推察される。

5. おわりに

本研究は、前述した通り、「アウトリーチ活動は「行事」としての意味はあるものの、音楽科の「授業」としては捉えられていない見方もいまだ根強い」との指摘から、学生の専攻領域やカリキュラム上の位置づけを考慮した上で、シナリオ型の授業実践を試行したものである。最後に、本研究の限界と今後の課題を挙げる。

まず、本実践は、演奏家（＝実践者）による事前学習がプログラミングされており、より“対話的な”鑑賞活動に繋がると考え試行したものであるが、学生の活動内における発言や反応から本実践を分析することには至らなかった。省察の記述より、学生の本活動における学びの傾向を考察することはできたものの、実践者の発言に対する学生の反応を詳細に分析する必要がある。

次に、エントリーポイントの機能の可否についての信頼性の問題である。実践者が設定したエントリーポイントが、活動において機能していることを今後どのように検証するかということである。全体におけるどのくらいの割合の学生が提示されたエントリーポイントから学びを深めることができれば、それが機能しているといえるのか検証が必要である。本研究では、計量テキスト分析を中心に得られた分析結果から「エントリーポイントとして機能していたことが示唆された」としているのは、上記の理由からである。

第三に、学生の専攻領域やカリキュラム上の位置づけを考慮した上で本活動を試行したが、学生の「ピアノ学習とのつながり」や「初等教育の音楽科授業とのつながり」を意識づけることはできなかった。計量テキスト分析の結果、「ピアノ」に言及した記述はあったものの、自身のこれまで経験してきたピアノ学習や初等教育の音楽科授業における学びを本活動と結びつけた省察の記述は見られなかった。学生のこれまでの音楽経験と活動を結びつけるために、活動に適した曲の選択・活動の展開方法・効果的なエントリーポイントの提示方法などの検討が求められる。

〈注〉

- 1) 永島茜：音楽アウトリーチ研究の現在－活動が抱える課題の分析と今後の方策－ 武庫川女子大学学校教育センター紀要 (6) pp.95-108 2021年
- 2) 林陸：音楽のアウトリーチ活動に関する一考察－日本における導入の10年と今後の課題－音楽教育学の未来 日本音楽教育学会編 pp.280-290 2009年
- 3) 林陸：音楽教育におけるアウトリーチを考える－基本的な考え方、歴史的経緯、最近の動向 音楽教育実践ジャーナル 10(2) pp.6-13 2013年
- 4) 梶田美香：転換するアウトリーチ－音楽科教育への貢献－ 名古屋市立大学人間文化研究科人間文化専攻博士論文 2010年
- 5) 齊藤豊：音楽の授業におけるアウトリーチ活動の展開－アウトリーチ活動の目的と形態からみた分類の試み 音楽教育実践ジャーナル 10(2) pp.71-79 2013年
- 6) 地域創造：文化・芸術により地域政策に関する調査報告[報告書] 新 [アウトリーチのすすめ] 2010年
- 7) 上村有平・小野隆洋：音楽アウトリーチが子どもに及ぼす効果－感想文の分析から－ 山口芸術短期大学研究紀要 (53) pp.15-27 2021年
- 8) 小田郁枝・根津知佳子他 3名：『音楽実技』に関するシナリオ教材開発 日本女子大学紀要家政学部 (66) pp.53-60 2019年
- 9) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して 株式会社ナカニシヤ出版 2020年
- 10) エリック・ブース（久保田慶一監修・訳、大島路子・大類朋美訳）：ティーチング・アーティスト－音楽の世界に導く職業 水曜社 2016年
Eric Booth ; The Music Teaching Artist's Bible : Becoming a Virtuoso Educator Oxford University Press 2009
- 11) 大類朋美：音楽によるアウトリーチ及びレジデンシー活動におけるティーチング・アーティストの役割 科学研究費助成事業研究成

- 果報告書 2015 年
- 12) 久保田慶一：新しい音楽鑑賞：知識から体験
へ 水曜社 2019 年
- 13) 前掲 エリック・ブース pp.10-11
- 14) 前掲 エリック・ブース p.29, p.38, p.39
- 15) 前掲 上村有平・小野隆洋 p.20
- 16) 前掲 久保田 p.44
- 17) 前掲 エリック・ブース p.105